

著者略歴

見坊豪紀（けんぼう ひでとし）

1914年、東京に生まれる。東京大学文学部卒業。

旧制東京高校教授，岩手大学教授，国立国語研究所第三研究部長。現在、『三省堂国語辞典』編集主幹。

著書：『ことばの海をゆく』（朝日選書），『ことば さまざまな出会い』（三省堂），『現代日本語用例全集』（筑摩書房）他多数。

日本語の用例採集法

● 発行 一九九〇年三月二十日 一刷発行

● 著者 見坊豪紀

© 1990 Hidetosi Kenbo

Printed in Japan

● 発行者 及川 毅

● 発行所 株式会社 南雲堂

〒一六二 東京都新宿区山吹町三六一

電話 営業（〇三）二六八一—三三八四

編集（〇三）二六八一—三三八七

FAX（〇三）二六〇—五四二五

振替口座・東京 六一四六八六三

● 印刷所 （財）大蔵省印刷局朝陽会

● 製本所 株式会社長山製本所

検印省略 落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-523-26151-2 C1081 <1-151>

目 次

ことばの採集方法

- 1 ことば——今と昔 3
昔の野球記事(三) 昔の新聞記事(七)
- 2 話しことばからの採集 17
- 3 ことばの採集歴とカードの取り方 28
書き抜き法(二六) 過渡期——シート方式(三三) リプリント法(三四) 切り抜き法(張り付け法)(四一) コンピ
ューター方式(四三)
- 4 カードの作り方・使い方 45
カードの大きさ(四二) カードの書き方(四七) カードの書き方の変遷——私の場合(四九)

用例と辞書

- 1 用例採集の記録——『明解国語辞典』(旧版)の場合 55
- 2 用例の所在と評価 77
- 3 辞書にのせる基準——私の場合 99
あるかないか(九六) いくつあるか(一〇三) その他の基準(一〇六) 結論(一〇九)

岩波文庫を読む(作品名)

- 紅い花(二六) 赤と黒(上)(二七) 赤と黒(下)(二八) 阿部一族(二九) 雨傘(三〇)
(二三) あらくれ(二三) 嵐ヶ丘(下)(三四) 或る女(前)(三四) ある女の生涯(三五)
アミエルの日記(一)
アルトハイデルベル

ク(二三)	アルルの女(二三)	アンデルセン童話集(五)(二三)	アンデルセンお話と物語集(十)(三六)	暗夜行路(前)(二三)	暗夜行路(後)(二三)	イエイツ詩抄(三三)	一茶俳句集(三三)	イノック・アーデン(三四)
イワンの馬鹿(三五)	上田敏詩抄(三六)	浮世床(三七)	浮世風呂(三九)	運命論者(四〇)	オプローモフ(二)(四四)	オプローモフ(三)(四四)	オプローモフ(四)(四六)	オプローモフ(五)(四六)
かくれんぼ(二五)	風立ちぬ(二五)	蟹立船(二五)	カラマーゾフの兄弟(二)(二五)	カラマーゾフの兄弟(一)(二五)	雁(二五)	勸進帳(二五)	強国論(二六)	狂人日記(二六)
桑の実(二六)	幸福論(二七)	高野聖(二七)	国姓爺合戦(二七)	こゝろ(二七)	蜘蛛(二七)	胡麻と百合集(二八)	山椒太夫(二八)	三人姉妹(二八)
に至る病(二八)	忍ぶの惣太(二九)	渋江抽斎(二九)	ジャクリヌと日本人(二九)	ジャン・クリストフ(二七)	実録先代萩(二八)	死に至る病(二八)	純粋理性批判(上)(二九)	新アラビヤ夜話(二九)
授手習鑑(三〇)	スケッチ・ブック(三〇)	助六所縁江戸桜(三〇)	青春彷徨(三〇)	千一夜物語(一)(三〇)	菅原伝授手習鑑(三〇)	隊商(三〇)	宝島(三〇)	啄木歌集(三〇)
多情仏心(前)(三三)	チエルカッシ(三三)	近頃河原達引(三三)	血と砂(上)(三三)	茶の本(三三)	中世騎士物語(三三)	ツールの司祭(三三)	つゆのあとさき(三三)	寺田寅彦随筆集(一)(三四)
田園交響楽(三三)	田園の憂鬱(三三)	ドイツ国民に告ぐ(三三)	ドイツ民譚集(一)(三三)	トオマス・マン短篇集(一)(三三)	二都物語(上)(三三)	二都物語(中)(三三)	二都物語(下)(三三)	人間の誕生

(三四〇) 鼠小僧(三四一) 野菊の墓(三四二) 伸子(上)(三四四) 背徳者(三四五) 破戒(三四七) 八笑人(三四九) 艶
 姿女舞衣(三五一) 春夫詩鈔(三五三) パルムの僧院(下)(三四四) 緋文字(三五五) 漂泊の魂(三五七) プウニンとバ
 プリン(三五七) 笛師のむれ(上)(三五八) 笛師のむれ(下)(三五九) 不壊の白珠(三六〇) フォースタス博士(三六三)
 富嶽百景(三六三) 福翁自伝(三六五) 蒲団(三六七) 冬の宿(三六八) プロタゴラス(三七〇) 平凡(三七二) ヘーゲ
 ル哲学の批判(三七四) 弁天小僧(三七六) 本朝廿四孝(三七七) マノン・レスコオ(三七八) 萬載狂歌集(三八〇) み
 づうみ(三八三) 未来のイヴ(上)(三八三) 未来のイヴ(下)(三八四) 武蔵野(三八五) 陸奥直次郎(三八七) 妄想
 (三八八) 盲目物語(三九〇) 焼跡のイエス(三九三) 友情(三九四) 幽霊曲(三九五) 雪国(三九六) 預言(三九七) 義
 経千本桜(三九九) 羅生門(四〇〇) 獵人日記(上)(四〇一) 獵人日記(中)(四〇三) 獵人日記(下)(四〇六) 零落者の
 群(四〇七) ロビンソン・クルーソー(一)(四〇八) ロビンソン・クルーソー(二)(四一〇) 若いエルテルの悩み(四一二)
 笑(四一四) ワンダ・ブツク(四一五) 中タ・セクスアリス(四一六)

用例採集雑感——「まとめ」にかえて 321

「能う」の処置と『言苑』の特色(三三六) 辞書にないことば(三三九) 辞書にない意味(三三二) 語源がわかった(三三三)
 外来語をめぐる話題(三三七) 呼応(三四〇) 意味の小変遷(三四四) 退場することば(三四八) 古い形・新しい形
 (三五二) 古い表記(三五七) 同表記で異なることば(三六六)

図版・表の所在

「A」の証拠記事(五) 試験的(七) ワ氏病(六) 虎疫、虎列刺(八、九) 「客」の読み方(二二) 珍客(三三) 申
 訳的(三三) 独演会(三三) 暑中お化粧(三四) レート(三四) 素化粧法(二五) 御粧(二六) 美粧(二六) 召物

(一六)	シート方式の図(三三)	「トウ」のカード(三五)	「とうが立つ」のカード(三六)	一字漢語サ変動詞の語形
一覽(カの部)(六五)	松井氏を取り上げた語形(七九)	新規項目がのるまで(九五)	規定・基準の図式化(九六)	
『言苑』に出ていないことばの抜き書き(三三)	『明国』『三國』にのった語数(三四)	3版『三國』にないことば(三四)		

付録	併録作品の索引	366
----	---------	-----

あとがき	371
索引	408

ことばの採集方法

江苏工业学院图书馆
藏书章

1 ことば——今と昔

昔の野球記事

ここに一つの記事がある。

全国高校野球選手権大会決勝戦の記事である。

甲子園球場でくりひろげられた二十一日の第五十八回高校野球決勝戦。桜美林高校とPL学園の熱戦を、新田恭一さん^(七)、横濱市戸塚区矢部町、矢部団地七—四〇三—is、自宅のテレビで食い入るようにみつめていた。新田さんは、大正五年夏の第二回大会（当時は中等野球）で、優勝した慶応普通部の投手だった。（「サンケイ」昭和五年八月二日朝刊18「60年前の感激思い出されます 夏の高校野球」）

これだけの記事なら、大したこともないのだが、大正五年の新聞記事（「時事新報」）が写真版でのついで、そこに「六A対二」とあるのに注意を引かれた。いわゆる「アルファー勝ち」を示す「A」の証拠を私は長年の間探していたからである。

むかし、野球の試合で、九回の表が終わった段階で後攻めのチームが勝っている場合、スコア・ボード（と言っても、多くは手書き）の最後のます目に大きく「α」と書き、これを「アルファー」と呼んだものだった。ギリシ

ヤ文字最初の字母の「^{アルファ}α」を記入した、と了解していた。「α」とは、じつさに試合を続けていたら入っていたかもしれない点数を示す略語だと思っていた。そういうときの得点を単に「六対二」と書くともぎらわしいので、大文字を使って「六A対二」と書き、口でも「六アルファ、対二」と言っていた。また、そのような勝ち方を、「アルファ勝ち」とか、「アルファ付きで勝った」とか言っていた。

ところが戦後になって、この「α」は、じつは「X」（バッテン）であることが判明した。バッテンは、ふつう「/」を先に書き、「/」をあとに書く、このとき、つまり左下から右上に移るとき、線がつながったりして、ギリシャ文字の「α」のように見える。まさかバッテンだとは思わないから、学のある人がギリシャ文字だと思いこみ、世間に広まった。しかし今、新聞はX、X、xなどで表す。

こうしてアルファは、質上げ交渉の「^{アルファ}プラスアルファ」に名残りをとどめているだけである。物がほろびてことばだけが生き残った一例である。

こんなわけで、アルファ勝ちの場合の「^{アルファ}A」を使った使用例は、もしあればひ証拠に記録したいと思つて、日ごろ気を付けていた。

そこへ、当時の「時事新報」の記事が写真版でのつた。貴重な資料なので、国立国会図書館へ出向いてその部分を複写してもらった。

「^{アルファ}A」の証拠記事（次頁）

この記事に、各イニングごとの得点の内訳がないので詳しいところまでは分らないが、「^{アルファ}A」の使用例の証拠としてはりっぱなものである。

野球に限らず、相撲、碁、将棋、競馬など、型にはまった記事ながら、時代をへだててながめると、用語・文体

ともに今と違つた点が多い。

その一例として、下記の野球記事の全文を次に引用する。ゴシックの部分は、今の用語とちがうところである。(以下、本書全体を通じて、漢字は新字体、かなは原文のまま。なお「」は見坊の注記)

慶応の大勝に帰す／＼六A対二を以て〔見出し〕

全国野球大会慶普対市岡中学の試合は廿日午後より行はれたるが一回市岡の富永二塁を過〔ら〕して出しも無為、慶普代りて攻め佐藤三振ジョン慶普〔山口の誤り?〕共に飛球に倒る二回両軍無為、三回市岡無為慶普田嶋遊撃の失に出で佐藤バンドして一塁に生く、更にジョンのバンドを富永三塁に悪投し田嶋生還一点を入れ尚山口四球に出で、塩川三振後河野の安打と平川のゴロに依り佐藤ジョン生還足立一塁に二死となるや又山口生還更に出口(、)投手の過ちに乘じて生還計五点を挙げ、四回市岡平松の二塁越安打に田中生還魚谷一塁を過らして平松生還二点を得、慶普代りて二死後山口は塩川の二塁打にて一点を加ふ五、六、七、八回双方無為九回、最後の攻撃なるも魚谷ゴロに倒れ〔松〕本鈴木三振して遂に六A対二のスコアにて慶普勝利となる時に四時半(審判三木、都築、北村)

運動競技界

慶應の大勝に帰す

六A対二を以て

全国野球大会慶普対市岡中学の試合は廿日午後より行はれたるが一回市岡の富永二塁を過〔ら〕して出しも無為、慶普代りて攻め佐藤三振ジョン慶普〔山口の誤り?〕共に飛球に倒る二回両軍無為、三回市岡無為慶普田嶋遊撃の失に出で佐藤バンドして一塁に生く、更にジョンのバンドを富永三塁に悪投し田嶋生還一点を入れ尚山口四球に出で、塩川三振後河野の安打と平川のゴロに依り佐藤ジョン生還足立一塁に二死となるや又山口生還更に出口投手の過ちに乘じて生還計五点を挙げ、四回市岡平松の二塁越安打に田中生還魚谷一塁を過らして平松生還二点を得、慶普代りて二死後山口は塩川の二塁打にて一点を加ふ五、六、七、八回双方無為九回、最後の攻撃なるも魚谷ゴロに倒れ〔松〕本鈴木三振して遂に六A対二のスコアにて慶普勝利となる時に四時半(審判三木、都築、北村)

市岡	普慶	藤
富嶋	佐ヨシ	山口
田松	山塩	川野
平山	河平	川立
魚岡	足出	口嶋
鈴木	田	
永道	左一	
中本	投三	
松田	右遊	
谷本	遊二	
木	捕中	
投遊		
捕左		
右一		
三二		
中		

打数、安打などの記録略

〔「時事新報」大正五年八月二日朝刊5〕〔「サンケイ」に「八月二十二日」とあるのは、「二」の誤り〕
 追記「サンケイ」の記事には〔投手〕「新田恭一さん」とあるが、「時事新報」では、「投 山口」とある。
 なお、「時事新報」の記事は、以下に紹介する分もふくめ、総ルビ付きである。

右は比較的冷静な報道記事と言えるが、この前年第一回甲子園大会の決勝戦の記事は、次のとおりである。

此所を先途と闘う十回戦の京軍〔京都二中〕の攻撃番藤田、決然強弓を絞って鳴鏑鋭く第一壘を陥れ、後援〔後続〕声を合して各堡砦に順進し、旗幟を翻して壘に満つるの好機に際会し、内藤重責を双肩に負い、勢球夏〔かつ〕と鳴つて深く左翼を襲うと見れば、〔略〕

〔「アサヒグラフ」昭和三十九年八月一四日号58「ルーム」欄引用による〕

若武者の戦陣での働きに見立てた描写は異彩を放っているが、この記事は、異彩ある描写を助ける特殊な用語と古い野球用語とが混在しているところに、「時事新報」の記事との違いが見られる。同時に、ほぼ同じ年代の二つの資料間の用語法の違いにも注目されるのである。

同じような感想は、碁、将棋など各種の記事についても観察されるが、今は、野球にしほって一端を紹介した。

昔の新聞記事

「時事新報」の同じ日の別な記事を見よう。

七十年前の新聞の記事は、野球記事に限らず、だいたい印象が違う。野球記事以外の文章も少し読んでみたが、まず第一に報道記事は文語文である。

政治・経済方面の記事はもとより、社会面の記事でも、かたい内容のものは、かたく文語文で報道したようである。

ここでは、「試験的」「ワ氏病」の二語に注目しながら、前後の文脈を引用する。

●我^{わが}巡查^{さへ}雇^や入^いは／試験^{しけん}的に／とジョンソン氏^{ジョンソン}語る^{語る}（見出し）

上海に於て日本人^{にほんじん}巡查^{さへ}三十名を備^{そと}入れの爲め過般^{あま}入京^{きやう}せる同地^{どうち}警務次長^{けいむじちやう}ジョンソン氏は語つて曰く「目下外務省及警視庁等と協議交渉中なるが、今回上海に於て日本人巡查を用ひんとするに至れば主として日本人の在留民七千人に對

●我^{わが}巡查^{さへ}雇^や入^いは 試験^{しけん}的に

ジョンソン氏語る

上海に於て日本人巡查三十名を備入れの爲め過般入京せる同地警務次長ジョンソン氏は語つて曰く「目下外務省及警視庁等と協議交渉中なるが、今回上海に於て日本人巡查を用ひんとするに至れば主として日本人の在留民七千人に對する必要より起れるものにて、最初は試験的の意味を以て少数を限るも其の結果に依りて更に増員する事定まれば出來得る限り精格良好にして且つ外國の國民が群居する土地なれば能く之等の事情に通ずべき者を備たく巡查の給料も今尚ほ研究中なるが大體に於いて英國巡查のそれ以下に決定し居れり、契約期間は五ヶ年を最長限とし必ず既成者ならざる可らず、給料の

する必要より起れるものにて、最初は試験的の意味を以て少数を限れるも其の結果に依りて更に増員する予定なれば出来得る限り体格良好にして且つ各国の国民が群居する土地なれば能く之等の事情に通ずべき者を得たく巡査の給料も今尚ほ研究中なるが大体に於いて英国巡査のそれ以下に決定し居れり、〔略〕

〔時事新報〕大正五年八月二日朝刊5

どこまで行つても文が終わらないのが一つの特色である。

「ワ氏病」の全文は次のとおりである。

●日本橋にワ氏病〔見出し〕

日本橋区万町五番地魚商若林健太郎（二十六）は本月十二日発病し同区品川町の高平医師の治療を受けつゝ、ありしが十九日午後四時遂に死亡しワイル氏病の疑あるより血液を細菌検査所へ送り目下検鏡中

〔時事新報〕大正五年八月二日朝刊5

「ワ氏病」というのは見出しの用語で、本文中では「ワイル氏病」であつた。ところが、そのころひじょうに恐れられた「コレラ」については、本文・見出しを通じ、

●日本橋にワ氏病
日本橋区万町五番地魚商若林健太郎（二十六）は本月十二日發病し同區品川町の高平醫師の治療を受けつゝ、ありしが十九日午後四時遂に死亡しワイル氏病の疑あるより血液を細菌検査所へ送り目下検鏡中

○鐵道院の警告
流行と共に鐵道院にては十九日同院日報にて全國管理局及び各驛に對し列車は勿論驛内等に就き豫防すべき注意の數々を通告したり、其内旅客に對しては飲料洗面等總ての用水は煮沸せしもの、若しくは水道の水、已むべからば指定されたる井水に依ること、併當其他の食物は嚴重なる検査を行ひ驛内及び列車の便所は念入りに掃除消毒し、若し旅客中に疑はしき病者を發見したる場合は直に所轄署へ通告し相當の處置をなすこと等數項なり

「虎列刺」およびその省略形である「虎疫」、二種類の表記が見られる。

□鉄道院の警告（見出し）（8ページ参照）

虎疫の流行と共に鉄道院にては十九日同院日報にて全国管理局及び各駅に対し列車は勿論駅内等に就き予防すべき注意の数々を通告したり、其内旅客に対しては飲料洗面総ての用水は煮沸せしもの、若しくは水道の水、已むなくば指定されたる井水に依ること、弁当其他の食物は嚴重なる検査を行ひ駅内及び列車の便所は念入りに掃除消毒し、若し旅客中に疑はしき病者を發見したる場合は直に所轄署へ通告し相当の処置をなすこと等数項なり

（時事新報）大正五年八月二一日朝刊5

○焼いた魚より煮た魚が安全
は魚から伝染したか（七十度の熱度でなければ死なぬ）志賀医学博士の談（見出し）

虎列刺！虎列刺！と云ふ声が市内到る処に湧き上つた、魚が危険だ、何が危いと騒ぎ立てるが、殊に魚に宿つた虎列刺菌は何れだけの力を以て何うして伝染するものか、重ねて北里研究所の／＼志賀博士に就いて聞いて見ると「今度の病源が布哇丸に在つたとすると、矢張り海から魚類に依

○焼いた魚より煮た魚が安全

今度の虎列刺は魚から伝染したか

（七十度の熱度でなければ死なぬ）志賀医学博士の談（見出し）
虎列刺！虎列刺！と云ふ声が市内到る処に湧き上つた、魚が危険だ、何が危いと騒ぎ立てるが、殊に魚に宿つた虎列刺菌は何れだけの力を以て何うして伝染するものか、重ねて北里研究所の

△志賀博士に就いて聞いて見ると「今度の病源が布哇丸に在つたとすると、矢張り海から魚類に依つて人間に傳染したものと想像される」

つて人間に伝染したものと想像される、〔略〕〔口語文の記事もある〕
〔時事新報〕大正五年八月二日朝刊5〕

ここで昔の新聞の用語・表記などに立ち入る余裕がないので、引用した限りでの、形にあらわれた二、三の特色にふれてみると、

0 一行一七字詰め。

1 見出しの頭に、○、□、●などを付ける。(文中の中見出しに△などを付けて目立たせることもある)

2 文末に「。」を使わない。全文「」で押し通している。

3 見出しも含めて(一)、全文総ルビ付きである。(漢字が読めなくても、節を付けて、歌うように新聞記事を朗読する風習が成り立った根拠は、この総ルビ付きにある)

ここでは、「試験的」「ワ氏病」「虎疫」「虎列刺」に注目しつつ、前後の文脈を引用したが、文中、「博士」のふりがなが、「はくし」「はかせ」と二通りになっている。「はくし」は学位令にもとづく正式の名称、「はかせ」は伝統的呼び方、また、民衆による呼び名であるが、同じ日の別な記事にも「上野博士」(「上野氏の辞職は全く圧迫」の記事中)とあるとおり、新聞としては「はくし」とすべきところであらう。

もう一つ、ルビで気の付いたことを言えば、「虎疫」の引用文中の「旅客」である。今は「りよきやく」「せんきやく」(船客)、「ちんきやく」(珍客)、「しゆきやく」(主客)転倒、であるが、以前は、「かく」と言っていた。い